

平成30年度 行政視察報告書

平成31年2月1日（金）

チャレンジ岡崎・無所属の会 杉山 智騎

小田 高之

1. 視察日程

平成30年10月23日（火）～10月25日（木）

2. 視察先及び視察内容

（1）長崎県島原市

地域児童見守りシステム事業について

（2）長崎県大村市

手話推進事業について

（3）大阪府柏原市

柏原市スタディ・アフター・スクール事業について

3. 視察内容

■地域児童見守りシステム事業について

10月23日（火） 13:30～

i) 長崎県島原市

人口 4.5万人、面積 82.97km²

国立公園雲仙を背後に持ち、有明海に面する旧松平藩七万石の城下町。島原の乱(1637年)、島原大変(1792年)を経て、島原半島の中核的役割を果たす。豊かな湧水が流れる「日本名水百選」に選ばれたまち。90年11月に始まった雲仙普賢岳の火山活動は96年に終息。09年8月、島原半島は国内で初めて世界ジオパークネットワークへの加盟が認定された。

ii) 地域児童見守りシステム事業について

〈事業の目的〉

安全、安心なまちづくり

近年、児童・生徒が巻き込まれる悲惨な事件が後を絶たず、都会ではない島原市においても、時折、児童に対する不審者の情報が聞かれるようになっている。そんな折、総務省のICT（情報技術）を利用した「地域児童見守りシス



テムモデル事業」(平成19年度)が実施され、島原市が委託を受け取り組んだ。

〈地域児童見守りシステムモデル事業実施状況(概要)〉

(1) 事業名称：島原市地域児童見守りシステムモデル事業

(2) 実施地域：長崎県島原市

(3) 実施対象：島原市内全小学校10校

・小学1年生・2年生

・特別支援学級、分校出身児童は小学6年生まで

H30年度 対象児童数

タグ装着者：775人(装着率92.3%)

(4) 実施体制：地域児童見守りシステム運営委員会を組織
構成員

・保護者代表(9人)

・各小学校先生代表(9人)

・市教育委員会(2人)、市長部局(1人)、事務局(3人)

(5) システムの概要

①児童の安心・安全を確保するシステム(見守りシステム)

・小学校全10校の31箇所の校門等に、ICタグリーダーとWEBカメラを設置。ICタグを持たせた小学1、2年生等を対象に、ICタグの読み取りと画像情報で登下校情報を把握。

・小学校では、管理機能(管理端末)から登下校状況の把握及び履歴確認。登録した保護者はインターネットを経由しメール・画像で確認。

②情報提供システム

・一般に公開するウェブサイトを構築し、コミュニケーション機能(登録者の入力機能)を搭載。それらの機能を活用し保護者や地域住民への情報提供を行ない、安全確保を図るための参加を促進。

・メール等による防犯・安全情報などの情報提供システムであり、情報提供システムのウェブサイトへは、島原市ホームページのトップページにバナーを設置。



iii) 所感

この事業は2つのシステムから成り立っている。①見守りシステム ②情報提供システム。このシステムは2つとも子どもの安全を守るために非常に意味のあるシステムだと感じました。しかし、①見守りシステムは小学校の出入りを監視するものだけであるということで、非常にもったいないと感じました。小学校の門を通過したというメー



ルが届くだけであれば、何かあったときに教師と保護者の連絡で事足りることである。しかも、このようなシステムを運用し始めると、あったら便利という声が多数となり、やめることもできなくなってしまう。この見守りシステムをもっと発展させて、小学生が行ってはいけない場所（ゲームセンターや危険な場所）などにICタグリーダーを設置し、それを保護者に連絡する、もしくは、公園などにICタグリーダーを設置し、公園にいることを保護者に連絡するといった今後の横展開に期待します。そして、②情報提供システムは非常に有意義で地域力向上へつながる事業であると感じました。しかし、島原市では市民からの入力はほとんどなく、あまり活用されていないとのことでした。いたずらや情報混乱に陥ってしまう恐れのあるシステムではありますが、運用方法をしっかりしたら、安全なまちづくりへの大きな一歩になると思います。本市でも最新技術を活用しながら、まちの安全環境を整える施策を講じていただきたい。

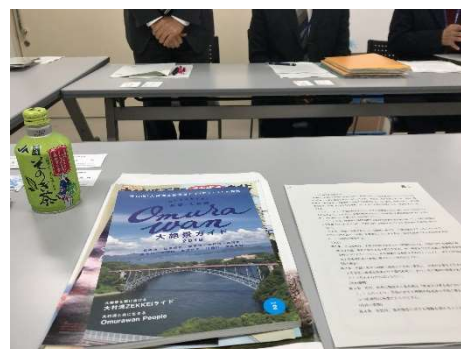
■手話推進事業について

10月24日（水） 10:00～

i) 長崎県大村市

人口 9.2万人、面積 126.64k㎡

長崎県中央部、長崎・佐世保両市の間に位置する。東に多良岳県立公園を望み、前面を波静かな大村湾に抱かれた風光明媚なまち。城下町として数多くの史跡を留める。世界初の海上空港である長崎空港や長崎自動車道・大村ICなど、交通アクセスの利便性から、公的研究機関の立地が進む。県の空の玄関口。



ii) 手話推進事業について

・大村市手話言語条例

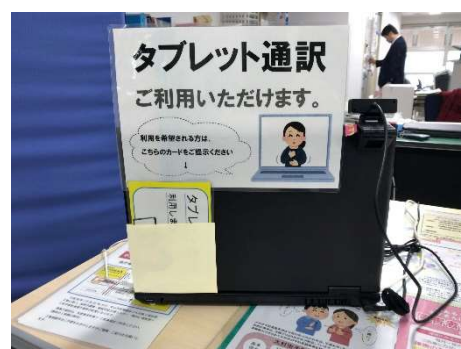
平成29年12月20日可決、平成30年1月1日に施行。

同様の条例は、全国で125の自治体が制定。（平成29年12月末現在）

長崎県では初めて大村市が手話言語条例を制定。

・手話推進事業

- ①タブレット通訳
- ②障がい福祉課出前講座
- ③情報番組おおむらシティナビへの手話ライブ
- ④窓口職員向け手話講座（仕事で使える手話講座）
- ⑤手話言語条例周知用パンフレット 全世帯配布
- ⑥手話通訳者養成講座



その他

市長定例記者会見 手話通訳

長寿介護課主催出前講座（手話）

・既存事業

- ①手話通訳相談員設置
- ②手話奉仕員派遣事業
- ③手話奉仕員養成講座

iii) 所感

大村市は手話言語条例を作ったばかりではなく、さらに手話を推進するために様々な事業を行なっている。窓口職員向け手話講座は民間21人、市役所19人と受講者数も多く、求められていると感じます。視察冒頭の挨拶で、自分が手話を交えて自己紹介をさせていただいたら、先方の挨拶のときにも手話を交えて自己紹介をしてくださった。手話への意識の高さを実感しました。



手話奉仕員養成講座では昼と夜の二部制にして、仕事をしている方でも参加しやすい環境を構築。そのおかげで、昼は10名の受講者数だが、夜は55名の受講者数となった。手話出前講座では学校、幼稚園、保育園、医療機関、福祉施設、一般企業など様々なところに出向いている。自分は常々思っていますが、小学校で1週間に1度くらいのペースでいいから、朝の会や帰りの会で手話にふれるようにしたいのと思っています。出前講座ではなく、実際に触れることが大切です。本市でも手話言語条例を制定し、教育現場で手話との距離をなくし、岡崎市民は誰でも挨拶程度は手話ができる、手話は特別なことではないと思えるようにしていきたい。行政サイドでもしっかりと検討し、誰もが手話に接することができるようにしてもらいたい。

■ 柏原市スタディ・アフター・スクール事業について

10月25日（木） 10:00～

i) 大阪府柏原市

人口 7.1万人、面積 25.33km²

大阪市の南東約15km、奈良県との境付近に位置。中央部を大和川が東西に流れ、市域の約6割が山間部であるなど自然環境に恵まれる。河内ぶどう、堅下ぶどうと呼ばれる柏原ぶど

うの栽培起源は古く、今から 280 年前（宝永 3 年）といわれている。現在でも観光ぶどう狩りや柏原ワインの生産が盛ん。江戸時代の和川の付け替えは柏原の地を起点に竣工。市内には数多くの史跡や文化財が残る。

ii) 柏原市スタディ・アフター・スクール事業について

・ SAS（スタディ・アフター・スクール）事業の概要 （1）目的

- 自学自習力の育成→学力向上
- 体力、社会性やコミュニケーション能力等の育成

・ SAS 事業の概要 （2）運営方法

〈推進委員会メンバー〉

小学校長 学生指導員代表 大学教員 地域ボランティア
専門指導員（教育研究所勤務） 市教委事務局

○柏原市 SAS 推進委員会（年 3 回）

事務局を柏原市教育研究所内に設置。事業を委託。

専門指導員（元校長）の業務

- ・ 運営費の管理、学生への謝金支払い
- ・ 児童のスポーツ安全保険の手続き
- ・ 学生指導員への巡回指導 など

○校内 SAS 推進委員会（年 3 回）

・ SAS 事業の概要 （3）予算

運営費	800,000 円
学生指導員補償費	4,887,500 円
事務局費	100,000 円
専門指導員報酬	4,166,000 円

・ SAS 事業の概要 （4）実施状況

- 対象 2 年生～ 6 年生
- 実施日 週 1～ 2 回
- 場所 SAS 専用の教室を設定

・ SAS 事業の概要 （5）実施内容

- 活動内容…宿題や自学自習プリントが中心
- 宿題以外の学習活動として…市で契約している教材をダウンロードして活用、
大阪府の学習指導ツールよりダウンロードした教材、



100マス計算、読書の木

ミニ新聞づくり、リコーダーや音読練習

○学生のがんばり

毎日こどもの様子、学習状況を「日報」に記録→情報の共有化を図る
スタッフミーティング

指導案の作成

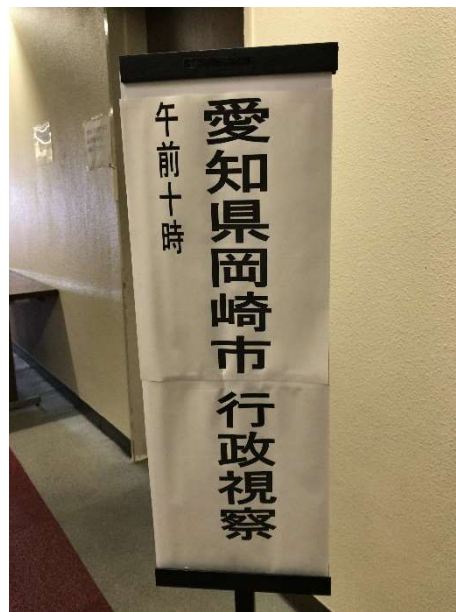
過ごしやすい環境づくり

手作りの出席カード

保護者向け通信

iii) 所感

小学生の授業後の居場所づくりの一環として、小学校の教室を利用してスタディ・アフター・スクール事業を開始。この事業には大学生からの支援もあり、学生と地域の方と大学生の交流も図っている。小学生からは「宿題をがんばることができた」「SASのプリントを頑張ることができた」「SASは楽しかった」「SASでの勉強はよくわかった」などの肯定的な評価が8割を超えており、保護者からは「SASのない日も帰ったら宿題、次の日の準備がすぐできるようになった」「日々の生活態度にけじめがついてきたように思います」「宿題以外の学習もするようになった」「分からないままにしないで、分かるまで頑張るようになった」「何事も進んでするようになった」と



非常に高評価を得られている。宿題や勉強をやる環境だけでなく、時間を意識したり、自分から行動を起こすことを促しているのも、これからの成長にとっても大切なことだと思います。学校以外の居場所として様々なものがあるが、本市はまだどれにも本腰を入れていない。色々な選択肢をつくることにより、現在の子供達の多様性に対応できると思います。これからは子供の居場所に関して、本市も真剣に考え、取り組むことを切に願います。